奈良県・中国ゆかりの地紹介

第四弾　唐招提寺

今年は、奈良県と中国陝西省が 2011 年に友好提携を締結して 10 周年を迎える記念の年です。 これを記念して、奈良県内にある奈良と中国とのゆかりの地、特に陝西省とのゆかりを中心にご紹介しています。第四弾となる今回は、鑑真和上にゆかりの深い唐招提寺をご紹介します！

唐招提寺は、奈良市西の京にある律宗の名刹で、唐から渡来した鑑真和上（688～763）が創建したお寺として広く知られています。鑑真和上は中国の揚州出身で、20～26 歳の頃、唐の首都である長安（現在の陝西省西安市）の実際寺（じっさいじ）や浄業寺（じょうごうじ）で修行しました。長安での経験を通じて、建築・彫刻・医薬学・書道等多岐にわたる分野において、当時最も進んでいた唐の文化を学んだのでしょう。

鑑真和上が日本に渡来した時、僧侶以外に、優れた職人や芸術家も同行させ、漢方薬や工芸品も多くもたらしました。唐招提寺の伽藍配置・建築技術・三彩瓦等の建築材料等、境内の所々に唐の影響が見られます。南大門に掛けられている扁額（へんがく）（寺院の門などの高い位置に掲出される看板）は、当時としては珍しく行書体で「唐招提寺」と書かれており、初唐の影響を受けたものとされています。

鑑真和上坐像 国宝（8 世紀）
写真提供：飛鳥園

中国人観光客の奈良県への訪問目的として、「教科書で勉強した中国の偉人である鑑真和上への敬意を表すために、唐招提寺へ参拝する」という人も多くみられます。また、毎年６月５日～7 日に行われる鑑真大和上坐像開扉にあわせて、日本各地から大勢の人が参拝します。仏教界だけではなく、日本の文化にも大きく貢献された故（ゆえ）に、鑑真和上はこのように今日も日中両国から尊敬されているのではないでしょうか。

唐招提寺には、貞享５年（1688 年）に、鑑真和上坐像を拝した際に松尾芭蕉が詠んだ「若葉して 御目の雫 拭はばや」の句碑が建てられています。「みずみずしい若葉で、（日本への渡来により盲目となった）鑑真和上の目もとの雫を、ぬぐってさしあげたい」という句を読んで、深く感動したのは私だけでしょうか？

（奈良県国際交流員　呉春蘭）

西安・浄業寺
写真提供：浄業寺

唐招提寺・金堂
写真提供：一般財団法人 奈良県ビジターズビューロー

松尾芭蕉句碑に向かう著者